

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

最高の国王か、最後の国王か？
(変わるネパールと変わらぬネパール：
グローバル化した世界に暮らす, 第16回)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 真木人 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5117



2001年、王族射殺事件がおきた王宮。かつては観光客に公開されていた（1996年）

変わるネパールと変わらぬネパール

——グローバル化した世界に暮らす——

第16回

2月1日、日本の新聞の一面を飾る出来事がネパールでおきた。ギャネンドラ国王が全閣僚を解任し、非常事態を宣言したのだ。国王は今後3年間で多党制民主主義を再生し、平和と安全を取り戻すため、自ら直接統治すると表明した。軍の最高指揮官である国王は、テレビでの演説後、直ちに軍を動員。政治家の自宅軟禁（後に一部解放）、電話・インターネット回線の停止（携帯電話を除き1週間後に回復）、空港封鎖（数日後に開港）をおこない世界中を驚かせた。さらに、反体制指導者の逮捕・拘留、報道の検閲と言論統制、平和的集会の規制など超法規的措置を断行した。

連載第8回で述べたが、ネパールは1996年以来、反政府武装組織の共産党毛沢東主義派（マオイスト＝毛派）が、王制撤廃と人民共和制の実現を掲げ内戦状態にある。国土の約4割は人民政府を樹立した毛派に支配され、人民軍のゲリラと治安部隊が各地で戦闘を繰り返している。昨年6月に再任されたデウバ首相の使命は、毛派と停戦合意し、今年4月までに総選挙を実施することであった。だが、和平交渉は進展せず、誰が見ても選挙の実現が絶望的な状況で、立憲君主であるはずの国王が政治に介入した。

下院の承認を経ない国王の非常事態宣言や、首相を議長とする国防会議の勧告がない、国王の軍

の使用は憲法違反である。だが、禁を破って国王は全権を掌握した。民主主義を擁護する国連や米国、インドはいち早く憂慮を表し、英米とEU諸国は大使を本国に召喚するようだ。だが、英米とインドこそ、これまで「テロリスト」対策としてネパール軍に武器や戦闘ヘリコプターを援助し、米国は軍事顧問団まで派遣して火に油を注いできたのだ。テロに屈しないという英米の強硬策は、結局、新たな独裁君主を誕生させ、市民の発言や報道・出版の自由が奪われる事態を誘引した。

国王は演説で、国の大事に団結して対処せず、権力闘争に明け暮れる政党と政治家を批判した。そして、国と国民に献身する君主を抱く制度がネパールの伝統だとし、親政への理解と協力を求めた。確かに人びとは自ら選出した政治家に失望している。だが、その代わりが、毛派と同様に暴力と恐怖によって権力を奪取するような人物に務まるのか。早期に停戦を成し遂げ「最高の国王」になるのか、それとも失敗して「最後の国王」になるのか？ 私には、国王は停戦への秘策もないまま、後者の道を一步踏み出したように見える。

最高の国王か、最後の国王か？

写真・文◎国立民族学博物館助教授 南 真木人

1961年、札幌生まれ。筑波大学大学院修了。専門は文化人類学、南アジア研究。主要共著『〈都市的なるもの〉の現在』（東大出版会 2004年）、「嗜好品の文化人類学」（講談社 2004年）、「エスノサイエンス」（京大出版会 2002年）など。